

7. ニホントカゲ二個体群間の成長の比較

長谷川雅美 (東邦大・理・生物)

Comparison of growth between two populations of the Japanese skink *Eumeces latiscutatus*. Masami Hasegawa (Toho Univ.)

1975年3月以来、千葉県船橋市東船橋の船橋高校構内および畑においてニホントカゲの生態を記号放逐法によって調査してきた。今回は頭胴長から見た個体成長を、ヒストグラムの経時変化および再捕個体の成長記録から推定し、畑と高校構内（以後中庭）とで比較した。中庭は校舎にはさまれた東西約100mの花壇、畑は区隔整理された畑の農道脇の帯状の雑草地である。両調査地間の距離は約300mである。孵化個体は頭胴長25~27mmで7月中旬~8月上旬に出現した。中庭では0才の秋に35~42mm, 1才の秋に53~64mm, 2才の秋に63~65mm, 3才の秋に66~68mmに達したが、70mmをこすものはまれであった。一方畑では孵化期および1才の6月までの成長は中庭と大差なかったが、以後の成長が優り、3才以上のほとんどは70mmをこし、最大79mmに達した。また1才の秋では雌は平均で雄より大きかったが、以後しだいに差が縮まり、最終的には雄の方が大型となった。1才時の成長速度（成長量/初期頭胴長 $\times 100 \times 7\text{Days}^{-1}$ ）は4月から7月にかけて上昇したが、7月下旬に急激な減少を示した。このときの頭胴長は約60mmで雄の二次性徴の現われ始める時期と並行していた。また0才では長雨の続いた1977年と雨のほとんどふらなかった1978年で成長のし方と冬眠前の平均頭胴長にちがいが見られた。

これらのことから同一地域にあっても生息環境や年による天候のちがいによって、最大体長や成長速度に差が生じることがあるといえよう。

8. 卵巣発達から見たカナヘビ雌の成熟について

竹中 践 (筑波大・生物)

Ovarian follicle size and sexual maturity of the lizard, *Takydromus tachydromoides*. Sen Takenaka (Tsukuba Univ.)

トカゲ類の雌の成熟の判定は多くの場合最初の生殖活動に入る時点の兆候、すなわち卵巣内の卵泡に卵黄が蓄積し始めることを基準にして行なわれている。カナヘビの場合にも同様の基準で判定することができるが、卵黄蓄積による卵泡の不透明化の判断は曖昧さを伴ない、また生殖時期前は卵黄蓄積を見ての判定はできない。カナヘビの未発達卵泡は順次大きさが異なる群をなすが、茨城県水戸市において成熟カナヘビは生殖時期後の一時期を除いて、直径1.4mmから順次小さくなる未発達卵泡群を持っていた。そのような大きさに達した未発達卵泡群を持つ個体を、たとえ卵黄蓄積卵泡を持たずとも、生殖潜在性のある成熟個体と考えると、比較的大きな体長でありながら、生殖期前の為に卵黄蓄積が見られなかった個体も成熟個体として無理なく判定できた。水戸におけるカナヘビ雌の成熟サイズは体長約42mmであった。また卵泡数についてもその成熟サイズを境界として急激な増加傾向に転じることが判明した。

9. イモリの同種間移植における精巣および肝組織片の免疫抑制効果

杵淵謙二郎 (巻高校)

Testis or liver induced immunosuppression of allograft immunity in newts. Kenjiro Kinehuchi (Maki High School)